



エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No. 7 May 1, 2023

<http://www.ses-japan.org/>

— 目 次 —

巻頭言「波の先にあるもの」	1
エッセイ	
「自然の力、ことばの力」	2
「伊藤詔子先生受賞ニュース」	3
「第 34 回 SES-J 大会報告」	4
会員の新刊紹介	5
News & Information	5
編集後記	7

巻 頭 言

学会創立 30 周年に向けて

塩田 弘 (SES-J 会長)

猛威を振るった新型コロナウイルスも、ようやく鎮静化の兆しがみえてきました。今年度は 4 年ぶりに対面での学会も可能となりそうです。折しも、戦争、地震、異常気象など、世界各地で人間社会を大きく揺るがす出来事が起こっています。世界中の多くの人々が困難に直面し、危機感を抱いている中、エコクリティシズムを通じて会員の皆様と問題意識を共有できますことを有り難く存じます。

エコクリティシズム研究学会は、1994 年に Scott Slovic 教授が広島大学に来学され講演頂いたのを出発点に、翌年の 1995 年 4 月に第一回研究会として T. T. Williams 来日記念談話会が開催されました。この年以降、毎年の研究会、機関誌等の出版を重ね、2025 年には学会創立 30 周年を迎えます。これまで伊藤詔子先生をはじめ、会員の皆様のご指導とお力添えのおかげと深く感謝しております。今後とも、なにとぞご支援を賜りますようお願い申し上げます。



自然の力、ことばの力

谷岡知美（広島工業大学）

2023年の3月、第54回 NeMLA に出席するため、アメリカのニューヨーク州ナイアガラフォールズを訪れた。会場と宿泊したホテルは、ナイアガラの滝まで徒歩5分の所に位置していた。外に出ると、常に「ゴー」といった、そんなに大きな音ではないが、何か背後でずっと鳴り響いているような、今まであまり耳にしたことがない音が、昼夜問わずずっと聞こえていた。何の音だろう、とぼんやりと考えていた。

ちなみに、（渡航費用の関係で）カナダのトロント経由でアメリカ合衆国に入った。トロントのピアソン国際空港には夜に到着し、そこからリムジンバスでナイアガラフォールズへ向かった。カナダ側のナイアガラフォールズに入った時、リムジンバスの運転手が、「きれいだろう、時間が経つと色が変わっていくんだ」と、ライトアップされた荘厳な滝を指して話しながら、バスの速度を落としてくれた。真っ暗な中に、ピンクの光に照らされた白い水しぶきが豪快に上がっていた。夜に見たのは初めてのことで、これは自然のものなのか、人工的なものなのか、何とも言えず圧倒された。美しかったのは確かだ。

NeMLA では、自身の発表に加え、セッションの聴講を忙しく予定に組んでいたため、なかなかナイアガラの滝を観に行くことができなかった。しかし、合間を見つけ、まずは最終日の午前中、曇りで小雨の中、見に行くことにした。滝に近づくにつれて、ずっと気になっていた「ゴー」という音が大きくなっていった。滝の音だった。滝の音が街に鳴り響いていたのだった。灰色を背景としたアメリカ側の滝は、音と一体化した自然としてあらわれ、カナダ側の滝よりも規模はかなり小さかったものの、少し怖い感じがした。きれい、というよりはむしろ、不気味な感じすらした。次に、同日の午後、急に晴れてきたので、晴れの中では滝はどういう姿なのだろう、と思い、もう一度見に行った。明るい太陽のもと、青空を背景に、白い波が光り輝いていた。空には大きなカモメが舞い、まさに大自然の一部を切り取った絵のように映った。素直に感動した。

このように、ナイアガラの滝ひとつとってもそうであるが、自然はその時々で様々な表情を持つ。時には人を脅かすような脅威として、時には人の心を癒すような風景として。そのような力のある自然に接した時、われわれは感激したり、圧倒されたり、寂しさを感じたりと、色々な感情を抱く。逆に、そんなわれわれの感情が、そのまま目の前の自然に投影される、ということもあるだろう。言うまでもないが、自然には説明しがたい、未知の力がある。

ところで、私は NeMLA において、「詩と発話行為論」という主題の研究発表を行なった。「発話行為論」(speech-act theory)とは、イギリスの哲学者である J. L. オースティン(J. L. Austin, 1911-60)が編み出した理論であり、その主旨は、「私たちは何かを言うことで、何らかの行為を行っている」とか、「何かを言うことは同時に、何かを行なっていること」である。オースティンは、彼の「一般理論」(the general theory)について、「何かを言うこと」を、「発話行為」(locutionary act, of saying)の遂行と名づけた。また、一つの発話行為を行うことを、一般的に、同時に、それ自体において、「発言の中で、何かを行なう場合、一定の慣習的な力をもつ発話」のことを、一つの「発話内行為」(illocutionary act, in saying)を行なうことである、と述べた。ここでの行為の遂行の際、「言語が機能する仕方の様々なタイプの理論」を「発話内の力」(illocutionary force)の理論と呼んだ。さらに、「何かを言うことは、しばしば聞き手や話し手、もしくは他の人々の感情、思考、行動に一定の結果的効果をしばしば生み出すもの」で、発話行為と発話内行為の遂行に、「間接的にのみ関連づけられる、あるいは全く関連づけられない行為を遂行した」、この種の行為の遂行を、「発話媒介行為」(perlocutionary act, perlocution, by saying) (なにかを話すことによって、なんらかの効果をねらうもの)の遂行と呼んだ。

最終的に彼は、「一般理論」を「発話内の力」の分類によってまとめているが、最後に、あらゆる発話が「行為遂行的」(performatives)であると認め、ことばが発せられた「状況」(circumstances) (文脈、手順、意図、目的)によって発言の種類、構造、内容が変わるという事

に気が付いた。つまり、ことばも自然と同様、その時々には色々な表情を持つ。様々な状況によって、意味(meaning)——(いみ(sense)と指示対象(reference)を合わせたもの)——は変化する。さらに、その「発語内の力」は未解決なままである。

私は、実際に目にしたナイアガラの滝の様々な印象を呼び起こしながら、「自然」と「ことば」の共通点について漠然と考え、帰路に就いた。日本に戻ると、満開の桜が私を迎えてくれた。

伊藤詔子先生受賞ニュース

水野敦子（山陽女子短期大学）

すでに、塩田弘会長より、エコクリティシズム研究学会のメールにてご報告がありましたが、本学会名誉会長の伊藤詔子先生が 2022 年 7 月にコンコードで開催された米ソロー協会年次大会総会において、Walter Harding Distinguished Achievement Award を受賞されました。著名なソロー学者であり、1941 年の米ソロー協会創立に尽力した Walter Harding (1917 - 1996) の名前を冠した Walter Harding Distinguished Achievement Award は、ソロー協会が掲げる使命に貢献する意義深い学問的業績をあげた研究者を讃えるものです。Thoreau Society Bulletin No. 318 には、記事の文頭で以下のように掲載されていますのでご紹介します。

伊藤先生の受賞理由として、ヘンリー・ソロー、アメリカン・ルネサンス、環境文学の各分野での国際的な学問研究があげられています。広島大学へ提出された博士論文 *The Revival of Thoreau: Nature Writing and the 19th Century of American Society* (『よみがえるソロー—ネイチャーライティングとアメリカ社会』として 1998 年柏書房より出版) や、ソロー及び同時代作家に関する広範な論文及び講演、米ソロー協会から出版された生誕 200 年記念論集 *Henry David Thoreau Bicentennial: Message from the Woods* (2017) への寄稿、米ソロー協会ジャーナル *The Concord Saunterer* (2004) への“Thoreau’s Walden in the Global Community”と題する論文などが紹介されています。また、先生は、Rachel Carson や Terry Tempest Williams などの環境保護作家の研究もされ、*Oxford Research Encyclopedia* (2017) に寄稿された“American Nuclear Literature on Hiroshima and Nagasaki”は、アメリカの核文学についての心に響く論文であったと記されています。学会活動においては、日本ソロー学会では会長歴任後、現在は顧問をされて学会の重鎮であり、日本ポー学会の創立に関わり現在会長を務め、1998 年に立ち上げた当エコクリティシズム研究学会では 24 年間会長の職にあったことが記されています。『エコトピアと環境正義の文学—日米より展望する広島からユッカマウンテンへ』(晃洋書房、2008) では Scott Slovic 氏と共同編集者を務め、翻訳書として Williams の *The Hour of Land: A Personal Topography of America’s National Parks* (邦訳『大地の時間—アメリカの国立公園、わが心の地形図』、2019) と Lawrence Buell の *The Future of Environmental Criticism: Environmental Crisis and Literary Imagination* (邦訳『環境批評の未来—環境危機と文学的想像力』、2007) が紹介されています。また、先生のユニークな業績として、故 Bradley P. Dean との共同研究による手稿テキスト *Faith in a Seed, Wild Fruits* 2 冊をそれぞれ『森を読む』(宝島出版、1995)、『野生の果実』(松柏社、2002、城戸光世氏と共訳)として翻訳出版されたことも挙げられています。先生は講演者としても人気があり、米ソロー協会の年次大会には 10 回以上参加され、ソロー生誕 200 周年の 2017 年の学会では招待発表し、目が高いコンコードの聴衆の好評を得たことも同記事で明かされています。

伊藤先生は、本学会を中心に 5 冊ものエコクリティシズム共著論文集の企画編集出版にあたられています。ポーからソローに至る新しいアメリカン・ルネサンス研究をエコクリティシズムの視点から展開し、今なお影響力ある学者として 19 世紀アメリカ文学研究指導に当たっておられていることはご存知のとおりです。

今回伊藤先生とともに Walter Harding Distinguished Achievement Award を受賞されたのは、Megan Marshall 氏とフランスのリヨン大学教授 François Specq 氏です。その他の受賞者は、Walter Harding Distinguished Service Award が絵本作家の D. B. Johnson、Thoreau Society Medal は Lawrence Buell と Rebecca Solnit、また、Thoreau Society Nature Writing Award は動物行動学者の Jane Goodall の各氏でした。まさに錚錚たる受賞者の方方で、日本の学者として

お一人受賞された伊藤先生には、本学会も心よりお祝いを申し上げます。

追記：Web 百科事典 *Oxford Research Encyclopedia* (Published online: 26 October 2017) は下記のサイトでサマリーを読むことができます。本文は Oxford に登録してサインインすれば読めます。

<https://doi.org/10.1093/acrefore/9780190201098.013.165>

第 34 回 SES-J 大会報告

2022 年 8 月 21 日 (日) 9 時 25 分～17 時 10 分
Zoom によるオンライン開催

中村善雄 (京都女子大学)

本大会は当初対面での実施が予定されていたが、コロナ感染の第 7 波到来によって、3 年連続でオンライン実施となった。しかし、発表者も司会者も Zoom の扱いは手慣れたもので、ワークショップ、研究発表、シンポジウム、講演と盛沢山な内容であったが、滞りなく進んだ。

まず岸野英美氏が司会講師を務めたワークショップ「アジア系作家と病」では、深井美智子氏が Gail Tsukiyama の小説 *The Samurai's Garden* を題材に結核とハンセン病を取り上げ、病と異形の関係性や異形の生きる道の模索について考察し、真野剛氏は Yone Noguchi の詩集 *The Voice of the Valley* を中心に、Noguchi と John Muir との関係や、息子 Isamu Noguchi との複雑な親子関係にスポットを当てた。岸野氏はカナダ在住のアジア系作家 Vincent Lam の小説 *Bloodletting and Miraculous Cures* に描かれる SARS を取り上げ、病を通じたアジア系への差別やアジア系にとっての病の多様な意味を読み解いていった。引き続き研究発表が行われ、谷岡知美氏は Allen Ginsberg の俳句集である *Mostly Sitting Haiku* を Ezra Pound の理論や Paul Cézanne の空間創造を引き合いに出し、また小林一茶の俳句との比較をしながら、その文学的価値を明らかにしていった。塚田幸光氏の発表は Nikolaus Geyrhalter の *Our Daily Bread* を軸に、食料生産のプロセスや生命の循環といった「食」の政治学を、ディープフォーカスや静止画などを使って解き明かす Geyrhalter の映像的手法を解説すると共に、彼の無機質な映像の中に食の有難みを見出す刺激的な発表であった。その後、昼食を挟んで、後半では「<その後>の世界と文学」と題したシンポジウムが開催された。城戸光世氏による趣旨説明の後に、池末陽子氏が Edgar Allan Poe や彼の後続作家の描いた作品の中からポスト・パンデミック／ディザスター／アポカリプスのイメージを引き出すと共に、同じく彼の他作品に救済のテーマを読み取るという、作家の作品全体を渉猟する Poe 研究者らしい発表であった。中山悟視氏は (核) 戦争や疫病や大災害のその後の世界を描く Kurt Vonnegut の作品の中で、特に *Deadeye Dick* を取り上げ、日常的な出来事を並置することで非日常的な惨事を無効化していく作家の戦略性に焦点を当てた。城戸氏の発表は、William Miller の終末論を背景に“The New Adam and Eve”を初めとしたポスト・アポカリプスの世界を表現した Nathaniel Hawthorne から Margaret Atwood に至るまでの、作家たちのその後の世界を描く描写に共通性を見出そうとするスケールの大きな発表であった。最後の熊本早苗氏は Rebecca Solnit の「災害ユートピア」のその後の世界を描く *Recollections of My Non-Existence* や *Orwell's Roses* に弱者の声や信頼や連帯の意味を見出そうとする、氏の誠実さが滲み出た内容であった。本大会は引き続き、ロバート・ジェイコブズ氏による特別講演で締めくくられた。氏は放射性廃棄物の処理が将来の世代の安全性ではなく、現在の政治によって決定され、何世代にもわたる放射性廃棄物のレガシーが未来への警告を伝えるメッセージと化していることを主張し、未来を想って今を決定する必要性を痛感させられた。全体を通して、人種と病いや食や核廃棄物など、今日のニュース番組でも目にする問題を扱う発表が多かったのが印象的である。各人の発表を聞くにつけ、我々を取り巻く現実のみならず、本シンポジウムのタイトルのように「その後」の世界を提示してくれる作家の尋常ならざる創造／想像の力を改めて実感した。文学の斜陽産業化が叫ばれて久しいが、世界の行く末を考える時、文学が確かにその一翼を担うことを再認識する機会であったと共に、心地よい充実感に包まれた大会であった。全ての大会関係者に謝意を示す次第である。

会員の新刊紹介

メーリングリストで紹介された会員の単著です。



『慶應義塾とアメリカ—異孝之最終講義』

異 孝之著（小鳥遊書房）
発売日 2022年8月31日
四六判 280ページ
定 価 2,400円+税

日米慶應の三重文化(Triculture)！
環太平洋的、文化横断的、脱領域的な理論を得て脱アメリカ的アメリカ研究を照射する。そして、福澤諭吉を起源とする文化融合の想像力を深化させる思索の記憶。慶應義塾大学での最終講義「最後の授業」、著者のライフワーク「作家生命論」を収録！（帯紙より）

(<https://www.tkns-shobou.co.jp/books/view/462>)

News & Information

◆◆◆◆ 2023年度大会情報 ◆◆◆◆

エコクリティシズム研究学会大会

日時：2023年8月19日（土） 10:00～17:00

場所：広島県民文化センター（鯉城会館内） 「サテライトキャンパスひろしま」504号室

総合司会 湊 圭史

10:00 開会の辞 塩田 弘 会長

10:05～11:20 研究発表（各発表25分、質疑10分）

研究発表1： 10:05～10:40

日臺晴子

『人形師』におけるポリオの表象（仮）

（司会：中村善雄）

研究発表2： 10:45～11:20

長尾麻由季

『Toni Morrison's *A Mercy* and the Environment（仮）』

（司会：浅井千晶）

11:20～12:30 昼食

12:30～15:00 シンポジウム

「環境と戦争」

（司会・講師：松永京子、講師：大野美砂、菅井大地、林千恵子）

15:00～15:10 10分休憩

15 : 10~16 : 20 特別講演
講師：小谷一明 氏
[新潟県立大学教授、ASLE-Japan／文学・環境学会代表]
(司会：塩田 弘)

16 : 20~17 : 00 総会
17 : 00 閉会の辞 伊藤詔子 名誉会長

◇◆◇◆ 各種委員会からのご報告 & お願い ◇◆◇◆

☆(国際)広報委員より☆

会員の出版(単著・共著)・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストと HP でお知らせしますので、出版・学会については塩田 弘宛て (shiotah(*)shudo-u.ac.jp) に、書評については大野美砂宛て (misa(*)kaiyodai.ac.jp) にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページを一新しました。まだ改善の余地が残されていると思いますので、お気づきの点がありましたら、遠慮なくホームページ委員(水野、三重野)までお知らせください。また、「エコクリティシズムのテーマ」など、ホームページ上の記事のご提案がありましたらお寄せください。

☆事務局より☆

●会費納入のお願い

年会費 4,000 円(学生会員 3,000 円、シニア会員 2,000 円)のご納入を、2023 年 6 月末日までにお願ひします。(年会費を 2 年間未納の方は、会員資格を失うこととなりますので、ご注意ください。)

4 月 1 日現在で満 66 才以上の方はシニア会員になることができ、会費は 2,000 円になります。ご希望の方は、事務局の岸野英美宛て (hkishino(*)bus.kindai.ac.jp) まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願ひいたします。ご寄附については差支えのない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

●住所、所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、ご住所やメールアドレス・ご所属先等に変更があった方は、レビューの発送準備等がありますので、早目に岸野英美宛て (hkishino(*)bus.kindai.ac.jp) までご連絡下さい。

.....

編 集 後 記

ご多忙の中、ご寄稿頂いた会員の皆様には厚くお礼申し上げます。おかげで、無事 NL を発行することができました。メーリングリストでは、会員の出版情報として、昨年さまざまなジャンルの本の紹介がありました。NL の「会員の最新紹介」は単著のみとしているため、巽孝之先生のご著書のご紹介のみとなりましたのでご了承ください。5 月半ばには G7 広島サミットが開かれ、広島に外国人の数が増えたように感じる今日この頃です。行きつけの広島市内の小さなコーヒー店は、いつもは日本人ばかりですが、最近は店内のあちこちから英語が聞こえてきます。核の脅威にさらされている今、被爆地広島からいいメッセージが世界に届くことを願っています。(A. M.)

長らく続いた新型コロナウイルス感染症の分類も、この度 5 類感染症へと引き下げられることとなり、「慎重」を好む日本人もようやく同ウイルスと共存の道へと舵を切り始めました。今なおも感染への不安は拭いきれないものの、かつての日常を取り戻しつつあります。さて、今号では谷岡先生より米国でのご経験談を寄せていただきました。まるで文学作品であるかのような語りはナイアガラの美しい情景が目に見えかぶかのようなエッセイでした。中村先生の大会報告では、様々な問題に直面しながらも、困難に立ち向かう文学的創造力／想像力の可能性をあらためて認識いたしました。そして、日米の核文学を結びつけた論者を中心とする数々の偉業により、高い国際的評価を得られた伊藤名誉会長の受賞は、当学会においてもこの上ない喜びとなりました。冒頭の塩田会長の挨拶にもありましたように、当学会はまもなく創立 30 周年を迎えますが、会員の皆様の素晴らしい研究成果によって更なる発展を遂げていくものと期待しております。(G. M.)

エコクリティシズム・ニュースレター No. 7

会 長	塩田 弘 (広島修道大学)	発行日	2023 年 5 月 1 日
発行元	エコクリティシズム研究学会	編 集	水野敦子 (山陽女子短期大学)
事務局	エコクリティシズム研究学会事務局		真野 剛 (海上保安大学校)
	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12		
	愛知学院大学教養部 菅井大地 研究室		
	dsugai(*)dpc.agu.ac.jp		

(スパム防止のためメールアドレスの (*) は@に変えてください。)